
現実の裏話

るーみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実の裏話

【Nコード】

N3344W

【作者名】

るーみ

【あらすじ】

自分の作品の裏話集です。ネタバレ、メタ発言、キャラ崩壊注意です。

この作品について（まずはこちらを一読お願いします）

どうも、皆さん、おはようございます、こんにちは？　こんばんは？　おやすみなさい。寝てはいけないうつ。

世界一可愛い姫様のお側仕えをさせて頂いている、メイドのバレンシアでございます。

はじめましての方はいせんね？　もし知らずにここへ迷い込んでしまったのでしたらまずは、同一作者の『異世界トリップの現実』と『異世界転生の現実』、この二作品を先に読まれる事をお薦めします。どちらも話数がそれなりにありますので、あまり気軽に薦めていいものではないかもしれませんが……

『トリップ』は既に完結済み。『転生』は2011年9月1日現在その48まで、となっております。気が向いた時にでも読んで頂ければ、作者も喜びます。

では、ここからは全話読んで頂いた方々への説明になります。

この『現実の裏話』とは、名前そのまま前述二作品の裏話を投稿していく予定地となっております。裏話と言うより設定の垂れ流しとでも言いましょうか……

『トリップ』全話、『転生』の最新話まで読んで頂いた事を前提とした物になっております。ネタバレ満載ですね。

各話タイトル、前書きに注意書きなど、分かるようにはしていくとは思いますが、まだ手探り状態なので確実に、とはいかないかと

思われます。

ああ、『VRMMOトリップの現実 テスト版』については多分何も書かれないと思います。こちらは二、三分で思いついた設定を、男性視点の練習を兼ねて書いた暇つぶしのような物ですから。読んでいただけると嬉しい事には変わりありませんね。

今回は私の独白のような文章になっておりますが、次回からはゲストを迎えての会話形式のみでの本文になる予定です。私、姫様、それに加えてゲスト様お一人、という形になるのではないかと。

『トリップ』のその5辺りで書いた『異世界トリップの現実 i f』も、この『裏話』で投稿予定です。『私』さんと『彼』さんのもう一つの物語ですね。かなり短い短編の様なものなのですが、加筆修正を加え投稿されると思います。いつになるかまでは全く分かりませんが……

あまり話し過ぎてしまうと今後の文字数稼ぎができなくなりそうなので、この辺りで締めさせて頂きますね。申し訳ありません。

忘れていました。最後に大切な事を一つ。

『裏話』に登場する、私たち現実シリーズの登場人物たちは、本

編とは一切関係はありません。私は勿論の事、姫様までメタイ発言を繰り返す事になるでしょう。全力全壊キャラ崩壊確実です。

ちよつとこれは無いわー、等と言った感想は、申し訳ありませんが受け付ける事はできません。作者本人が読み返して、「これはひどい」、とニヤンちゅうばりの反応を見せた場合は、私のみメタ役になるかもしれませんね。

もう一つありました、失礼します。

疑問質問を、こちらの『裏話』の感想、ユーザーページにあるメッセージ、活動報告コメントなどで頂けると大変助かります。全てこちらの裏話で、答えられる範囲でお答えしていこうと思ひますので、何卒よろしく願ひします。

メタイことを言えば、ネタをください、という事ですネ。

おお、メタイメタイ。

シラユキ・リーフエンド（十二歳編開始直後）（前書き）

本編その48までのネタバレを含みます。

シラユキ・リーフエンド（十二歳編開始直後）

「皆さんごきげんよう。世界一笑顔の可愛い姫様の忠実なる下僕、バレンシアでございます」

「いきなりそれは恥ずかしいよ……。ゲスト？のシラユキ・リーフエンドです。ごきげんよう」

「姫様がごきげんよう！？ か、可愛い……！！」

「シアさんの真似しただけなのに……」

「今回のゲストは、『転生』の主人公であらせられるシラユキ姫様です。皆さん拍手を」

「誰もいないよ！？ まあ、いいんだけどね」

「現在姫様は十二歳。見た目は十歳の頃と全く変わってはいませんね。身長もmm単位でしか伸びていません。素晴らしい事です」

「mm単位で伸びてるの分かるんだ？ エルフは十歳からはゆっくり成長になるからね、百歳までにはきつとシアさんくらいの身長になってるよ。胸だつてきつと……」

「私のメイドアイで毎日確認していますからね、确实ですよ。毎朝姫様の身に付ける物全てをお着せさせて頂いている私の目に狂いはありませんよ」

「パンツくらいは自分で穿かせて欲しいんだけど、後、前から穿かせてもらうのはちょっと恥ずかしいな。贅沢言っちゃいけないんだと思うんだけどさ」

「恥ずかしがる姫様を見るのも私の趣味の一つ、諦めてください」

「性的な理由は？」

「ありませんよ？」

「怪しいなあ……」

「ではまずは姫様について。リーフエンド国の女王、エネフェア様の三人目のお子様、お姫様ですね。異世界らしくない名前は女神様がお付けになられたとか」

「うん。転生前の名前は思い出せないと言つか、消されちゃったみたいなんだよね。転生前はただの十六歳の女子高生、背はちよつと低め、運動も苦手、趣味は読書と音楽鑑賞、それとゲーム。完全にインドア派だね。読書は主に漫画、ゲームは一人で遊ぶRPGが多かったんじゃないかな？ オタクっぽいね。兄弟姉妹無しの人っ子で、恋人はいなかったよ。家には家政婦さんが一人、自覚無しのお嬢様だったりしたんだ」

「姫様はやはり前世でもお嬢様でしたか。恋人がいなかったというのは全力で安心しました。趣味については作者の趣味がそのまま反映されている感じがすよね」

「本人気づいてないだけでモテモテだったんだけどね？ 男子と言
うか、男の人が苦手では？ 一对一では喋れないくらいだったからね。何
故共学にしたし。まともに話せる男子は数人しかいなくて、一人だ
け中学入ってから長い付き合いの友達もいたかな。あんまり長く
ないかも？ まあいいや」

「恋愛感情にまでは至らなかったようですね、よかったです。では、
現在好きな方は？」

「ルー兄様と父様じゃない？ 二人とも恋人いるんだけどさ。でも
まだまだ家族としての好き、だよ。将来的にはどうなるか全く分か
らないねー」

「女性趣味に転ぶ、という道もありますからね。姫様に限っては確
率が低そうなのが残念で堪らないのですが……」

「まだ十二歳編始まったばかりだからね、成人までもまだ八十八
年もあるんだよ？ みんな過保護だし、多分一生恋なんてできない
よ……」

「前世でも今世でも、恋愛らしい恋愛はできそうにありませんね。
そういえば、六回の人生経験の中には結婚したり、子供を授かった
りする人生もあったのかもしれないよ」

「うん、あったと思うよ。赤い本二冊が読めるようになるのが楽し
みだね。赤い本は女神様も読んで大丈夫って言ってたし」

「黒い四冊では望まない妊娠などあったかもしれないよ……。
複雑です」

「黒いのは多分、気が狂ったりとかさ、犯され続ける日常とかあったんじゃない？ い、嫌過ぎる！！」

「本編では絶対聞けないようなセリフに私、興奮してしまいます。姫様にそういった発言はやはり似合いませんね、改めるべきなのか悩みどころです」

「メタるためには必要な事だと思うよ？ それじゃ次、今の私について、何かある？」

「前世と同じ様な説明で構わないかと」

「うん。名前はシラユキ・リーフエンド。リーフエンドの国のお姫様だね。年は十二になったばかり、エルフだとまだまだ子供だね。背は120ちよつとかな、体重も変わらず30kgも無いくらい(20kgちよつと？)、ちよつと痩せ過ぎな気もするね。白い髪を膝の下くらいまで伸ばしてるよ。瞳の色は青色。ハイエルフは青髪青い瞳が特徴らしいね、これは一部のエルフしか知らないことみたいだよ。女神様の趣味なのか何故か髪が白いんだけど、誰も気にしてないんだ。趣味らしい趣味はまだ無いかな？ 読書は勉強のうちだからね。魔法の練習もあんまりしてないよ。あんまりしてなくても既に一般的な魔法使いよりはるかに使えてしまっている事は、本人は理解してるのか、してないのか、謎だね」

「大きな胸が大好きと聞いてパッドを入れていた私ですが、あれは姫様がまだ生まれてすぐの頃、エネフェア様の胸から全く離れようとしなかった事が原因のようですね。その頃はまだ私はリーフエン

ドにいなかったのですが、二年も姫様をお世話できなかった事を本当に悔やんでいます」

「そんな理由が……。おっぱい好きと言うか、母様が好きだったんだよ多分。シアさんは私が二歳の頃に家に来たんだよね、全く覚えて無いんだけど……。二歳の頃を鮮明に覚えてたら逆に怖いかな」

「その辺りは一般の人と変わりませんね。大抵の転生主人公は、生まれてからの全てを覚えていてるようですが、怖いですよね……」

「好きな食べ物は苺！ アップルパイ、オレンジジュースと続くよ、ジュースは食べ物じゃないけどね。苦手なものは辛いものかな？ これは本編で書かれそうだね。苺のタルトとかイチゴオレにはならないんだ、苺は苺として食べるのが一番好き。ジャムとかシロップとか、苺全般が好きなのは変わらないんだけどね」

「一人称形式という事で、姫様は常に登場していますからね、今後のネタバレにも繋がってしまいますから、あまり詳しく話せないんですよ」

「先に『トリップ』のキャラを出すべきだったんじゃない？ あっちは完結してるんだしさ」

「名前の無いキャラは出し辛いんですよ……。姫様は今回はゲストですけど、一応レギュラー扱いになると思いますから、まずは登場していただきました。顔見せの様なものかもしれませんが」

「レギュラー？ ツツコミとして？」

イグザクトリー

「Exactly（そのとおりでございます）」

「ジョジョネタは精神年齢が低めであんまり出せないんだよね、プロントさんネタも同じく。プロントさんは特に言葉が荒くなっちゃうからね、実際に書いてみて、違和感が凄いから結局消しちゃうの繰り返し。早く私が大人になるといいね」

「大人になったら本編終わりますよ？」

「マジで!？」

「マジです」

「その後も姫様の物語は続くのでご安心ください。まずはゆっくりと成長してってくださいね。……精神的に」

「肉体的には!？」

「是非そのままできてください。毎日祈っていますよ」

「ホントに祈ってるんだね……」

「私の事はここまででいいんじゃない？ 全然説明できてないんだけどさ」

「やはり連載中のキャラ説明は難しいですね。見切り発車過ぎましたか……。これからは本編で死んでしまったキャラクターのみにし

ます？」

「誰か死んじゃうの！？　って百年も生きれば人間種族は死んじゃうか」

「まあ、来ないとは思いますが、感想などで募集するのもいいですね。ここを読んでいるあなた、そう！　あなた様の言葉で次回の登場キャラが決まるかもしれませんよ！！」

「うわあ……、露骨に読者一人に絞った言い方だよ。あ、シアさんは無しだね。どうせ謎メイドだから答えてくれないよ」

「メイドですから」

「それでは今回はこの辺りで……。次回の投稿は疑問質問感想が寄せられたら、にしますか？　ああ、次の更新はもう無さそうですね」

「こっちのシアさんははっちゃけてるなあ……。でも、本当に次回是完全に未定です。まずは家族から順に、とは思ってはいるんですけどね」

「では、　闇系の仕事が今からありますのでこれで」

「闇系？」

「暗室で姫様の盗撮写真の現像ですよ。言わせないでください、恥

ずかしい」

「盗撮！？ え？ カメラあるの！？」

「姫様からメタ分が抜けてしまったようですね。ここはホニャララ世界だという事をお忘れですか」

「ああ、そうだった……。なんてフリーダムなメイドさんの……。私も変な事言っちゃうよ？」

「暗室で聞きます。さ、参りましょう。さあさあ！」

「暗室で！？ や、やばい、逃げ」

「知らなかったのですか？ 謎メイドからは逃げられない」

「だ、誰か助けてー！！！！」

補足説明その1 (異世界転生の現実)

キャラ紹介ではなく申し訳ありません。今回は補足説明のみとなっております。

説明をさせて頂くのは、私。メイドのバレンシアでございます。
短い時間となりますが、皆様のお耳汚しを……、耳？ 目？ お
目汚しをする事をお詫び申し上げます。

早速ですが本題に入ります。

今回説明させて頂くのは、「エルフ」「ハイエルフ」、「家族」、
そして「国」。この四つの言葉の持つ意味についてとなっております。
す。

この四つの言葉はそれぞれ、その時使われる状況、実際に使われる
方によって意味合いが少々異なってくるのです。

ではまずは「エルフ」と「ハイエルフ」の二つについて。

姫様がご自分の事を「エルフ」と呼んだり、「ハイエルフ」と呼
んでみたりと、その時々によってバラバラになっていますよね。

エルフとお呼びになる場合は、エルフにハイエルフを含めた意味
での「エルフ」。

エルフとハイエルフとはっきり区別する場合は「ハイエルフ」と
分けてお呼びになっているのです。

姫様の方に限らず他の方々の場合も同じですね。「エルフ」という言葉は、大抵の場面でエルフとハイエルフを両方指しています。

次に「家族」についてですが、これは少し分かり難いかもしれません。

姫様を含めて王族の方々が仰る「家族」という言葉は二つの意味があります。

一つは血縁関係の「家族」。王族の方々一家ですね。

もう一つは、リーフエンドの森に住まう全てのエルフを含めて「家族」と呼ばれる場合もあります。

この言葉は書き分けが難しく、読んでくださっている方にちゃんと伝わっているか不安ですね。

なんとなく、フィーリングで感じ取っていただけると大変助かります。表現不足、申し訳ありません。

最後に「国」について。

この「国」という言葉もいくつかの意味で使われています。

まず一般的に国家そのものに対しての呼び名ですね。こちらは分かりやすいと思います。

問題はこちら。

リーフエンドの国に住む人々に限っての話なのですが、「国」という言葉の意味が噛み合わない場面が出てくるのです。

リーフエンドの森に住むエルフの方々の「国」はリーフエンドの森のみを。リーフサイド、その他リーフエンドの管理圏内の町の住民は、リーフエンドの管理圏内全てを指してリーフエンド「国」と呼びます。

本編で私が国と森を分けて話すのは、私が森の外からやって来たから、という事なのでした。

姫様はまだ使い分けをしている場面が見られますが、最終的にはどちらに落ち着かれるのでしょうか。まあ、私も他人^{ひと}のことは言えませんが……

ここまでのお付き合いありがとうございます。お疲れ様でした。この説明は恐らく本編では一切書かれないと思います。なので、こうして別枠として取らせて頂きました。わ、笑いの要素が一切無く本当に申し訳ありません。

ああ、最後についてですがもう一つ。

エロフの上級言語としてハイエロフという褒め言葉もあります。今現在この言葉に相応しいエルフはエネフェア様ともう一人でしょうか。ああ、勿論私のことではありませんよ。まだ本編には出て

来ていません、とも言いきれないですね……。ふふ、秘密です。

姫様にもまだまだ早い、いえ、姫様はハイエロフ程度で表現できるお方ではありませんでした。姫様の素晴らしさを皆様にお伝えし切れる表現力が私に無い事をお詫びします。

ふう……

それでは、先ほどから姫様が「はやくきて〜はやくきて〜」と寂しそうにされていますので、とんずらを使って普通ならまだ付かない時間できょうきよ参戦して参ります。

きつと、「もうついたのか!」「はい!」「きた! メイドきた!」「メインメイドさんきた!」「これで勝つる!」と大歓迎状態になるでしょう。

ではでは、次回がいつになるか分かりませんが、またお会いしましょう。

教えて！ シアさん先生！！ その1 (転生その51までのネタバレあり)

注意！！ 同時刻に投稿したその51のネタバレを含みます。

教えて！ シアさん先生！！ その1 （転生その51までのネタバレあり）

「皆さんごきげんよう。世界一瞳の純粋な姫様の忠実なるメイド、バレンシアでございます。姫様と目が合うと魅了されてしまいます、ご注意を。目と目が合う瞬間に好きだと気づかれますよ」

「^{チャーム}魅了の魔法！？ ああ、できるかも？ 助手のシラユキ・リーフ
エンドです」

「私に試してみませんか？」

「掛かったフリして襲うつもりでしょ？」

「掛かりました！ 襲いますね！！」

「まだ何もして無いよ！？」

「今回の『教えて！ シアさん先生！！』のコーナーは、とある読者様より感想で頂いた、姫様のお使いになれる雷の魔法についてですね」

「そんなタイトルあったんだ……。リーフエンド、と言うか、あの世界は電気が普及していない、理解されてもいないからね。さらに、魔法として使えるのはハイエルフのみっていう事もあって、一般的には使われていけないと思う。シアさんにも使えなかったもんね」

「ハイエルフのみしか使う事ができない、という設定は恐らく本編では書かれないかと。それだけ超上級難易度の魔法と言う事なのですね。私は魔法はそこまで得意ではありませんから、使えるようになる事はないと思います。しかし、雷を使う種族はちゃんといるんですよ？」

「え？ 雷を『使う』？ ああ、ピカ。ユウの獣人？」

「アウトです。正解は竜人族ですね。雷のプレスを吐く希少種と、雷を能力で発動させる事ができる者の二種類が存在します。どちらもハイエルフ並の希少種、お目に掛かる事はまず無いでしょう」

「竜人族かー、まだ一人も会った事無いね」

「良い子にしていれば会えますよ」

「サンタさん扱い！？ そこまで珍しいんだね、集落から出て来る竜人って……」

「話が逸れましたね、雷の魔法についてのお話でした。静電気を金属を通して他へ逃がす事ができないか、というご質問です」

「静電気で髪って膨れ上がるんだよね、面白いよね。原理は全く分からないんだけどさ」

「実はこの質問なのですが、よく分かりません」

「え!？」

「質問の意味は分かるのですが、金属へ逃がしてどうするのか、という事ですね。静電気についてはwikiってください。そもそも姫様のお使いになっている雷の魔法は、静電気ではありませんしあまり関係は無いのかもしれませんが」

「う、うん。まずは、金属を持って発動するとどうなるか、だね」

「その金属からも放電するだけですね。放電する場所は指定できても、放電する方向までは無理でしょう。自爆します。もっとも身近な電気伝導体、自身の体へと着弾しますね。これは姫様の場合のお話でした、すみません」

「私は電気効かないからね、じめんタイプ？」

「そうになると人はみずタイプですね。それは今はいいでしょう。では、他の王族の方が金属製のタクトを使い、相手に押し付け、そこへ雷の魔法を通したらどうなると思います？」

「相手に流れるんじゃないの？」

「電気は電圧の高い所から低い所へ流れます。いくら魔法とは言え、物理法則は曲げられない、でしたよね。正解は、相手は勿論自分にも流れて来ます」

「ええー、意味ないじゃん」

「持ち手を絶縁体にして置けば問題はありませんよ？ 電気に馴染みどころか、電気が存在すら知らなかった世界の住民にそれができ

るとは到底思えませんが……」

「な、なるほどね、でも、ゴムってあるの？」

「ありますよ、ゴムの木。あまり使われてはいませんがね。姫様の下着も紐パンですから。しかし、それは威力を抑えた場合の話ですね。あまり威力を上げ過ぎると短いタクトでは放電してしまうかもしれませんね」

「紐パンだということがバラされた！！ ゴムと違って締め付け感がないから気に入ってるんだけどね」

「雷の魔法は飛ばすのみなのは分かったけど、飛ばした場合、まっすぐ飛ばずに地面に引き寄せられると思うんだけど？」

「そこも考えられてはいるんですけどね、ちょっと説明が難しいですね。簡単に説明すると、電気の通る道を無意識のうちに作っているんですよ」

「え？ それって最強すぎない？ 相手に道を繋げちゃえば誘導弾だよ？」

「無意識のうちに、ですよ。放射状に広がっている炎が途中で上下左右に曲がる、投げた石が放物線の最も上の位置からさらに上に跳ね上がる、そんなイメージは普通出てきませんよ。この世界の魔法は現象を再現するのみですからね。石の場合は操作系の魔法で可能だとは思いますが」

「投げた石を魔法でキャッチする感じだよね、難しそう……。ああ、なるほど」

「姫様が魔法の矢を作れない理由がまさにそれですね。王族の方々の様に、なんとなくで気軽に使いこなすのは姫様には難しいでしょうね。後はイメージ力の底上げ、魔法で矢の形状にするイメージさえ掴んでしまえば……？」

「こ、これは本編でやろうよ……！」

「は、はい……！」

「雷の矢を飛ばす、のではなく、電気の通る道筋を作って、そこに流している、に近いですね。これは本編では説明されません。世界で誰一人として理解していませんから」

「誘導弾作れちゃう人もいるんじゃないの？」

「確かにいますね。ですが、才能の一言で済まされます。魔法はイメージの力、その人のイメージは理解できませんよ。本人も完全に理解してイメージしている訳ではないと思いますから」

「後は姫様の能力が明かされて無い今、これ以上の説明はできそうにありませんね」

「筒に弾を込めてエアガンはできると思うよ。説明できるのは私の

能力説明回が終わった後かな。ごめんなさい」

「今回も笑いの要素がありませんね……」

「紐パンだという事をバラしておきながらそれ？ まあ、いいんだけどね……」

「姫様に限らずこの世界の住民は紐パンが主流ですよ。材質に差は出てきますが」

「パンツの話はいいから……」

「姫様には苺のプリントが入った小児用パンツを穿いて頂きたいです。きつと凄くお似合いですよ」

「嫌過ぎる！！ 刺繍はごわごわするからやめてね？ そういえば縞模様、縞パンはあるんだよね……。どうやって染めてるんだろう」

「頑張りました」

「シアさんが作ったの！？」

教えて！ シアさん先生！！ その2 （『転生』 魔法について）

「全国の姫様ファンの皆さんごきげんよう。世界一寝顔の可愛らしい姫様の忠実なる戦士、メイドのバレンシアでございます。姫様の寝顔を一目見てしまえば理性を失う事間違いないので、誰にも見ることは叶わないのですが」

「戦士なのかメイドなのか……。アシスタントのシラユキです。シアさん夜中に部屋に忍び込んでるとか、ないよね？」

「姫様がフルネームでないのは書くのが面倒という訳ではありませんせんよ？」

「答えてよ！！」

「さて、『教えて！ シアさん先生！！』、第二回となりました。

今回も読者様から頂いた質問にお答えしていこう、と思うのですが

……」

「ですが？ 答え難いの？」

「ええ、今回も質問の意味がよく分かりませんでした。ああ、いえ、質問の意味は分かるのですが、どうしてそんな質問が出て来てしまっうのか、ですね。恐らくは作者の表現力不足によるものだと思います」

「どれどれ……、ブラックホール、中性子星、レーザー、核、反物質、特異点、亜空間、隕石、マイナス質量、事象の多連化、凍る炎、分かるのは隕石くらいしかないかな。これを魔法で再現できないかって事だよね」

「はい、質問と答え、両方を一度に出して頂いてありがとうございます。さすがは姫様」

「え？ 答えも？」

「姫様は転生前は普通の極一般的な女子高生だったのですよね？」

「うん。それなりに裕福な方だったとは思っけど、フツートの高校生だったよ？ ちょっと趣味がゲームとか漫画方面に偏ってたかもしれないけど」

「はい、それが詳しい答えですね。ただの女子高生が上記に並んだ超科学の結晶を理解しているとは思えません。いえ、ありません。異世界の住人なら尚更と言うものですね。よくお見かけする転生主人公の方々は、何故かwiki並の知識を持っていますよね。転生前は一般人だったというブログが壮大な伏線にでもなっているのでしょうか？ 明らかに一般人を超えたレベルの知識の方々はかりですよね」

「ああ、なるほどね。メタ空間だから分からなかったよ。でも、メタな意味での質問かもしれないよ？」

「そついう捉え方もありましたか、失礼しました。そちらのお答えは、できるけどできない、と言ったところでしょうか？ 姫様、い

い夜空ですねー、月が綺麗です」

「よ、夜空！？ シアさんが壊れちゃった！！？」

「いまのはちよつと傷つきましたよ、覚えておいてくださいね。姫様、空の星、落とせます？ 操作系の魔法で」

「え？ いやいや無理でしょ。触れずに物を動かせる魔法だけどさ、星つてどれくらいの質量あるの？ 仮に動かせたとして魔力はもつの？ ああ、これが答えだね……」

「今回の質問の答えを纏めます。神とも呼べるほどの魔法の才能と無限の魔力、そしてこの世の理の全てを理解。三種全て揃えば可能なのでしょうか？ どれか一つのみでも現実味が既にありませんね。100%の答えは出せませんでした。ファンタジーの世界、小説の世界と言っても、そこは私たちにとっては現実の世界なんです。その世界はその世界として閉じてしまっているんです。そこだけは理解をお願いします。表現力不足を心からお詫び申し上げます」

「こんな質問をするなーって意味じゃないですよ。できたらこの世界についての事、例えば兄様の趣味とか、コーラスさんの胸のサイズとか、シアさんの下着は何色だ、とか。そういう質問が来ると嬉しいですよ。今回は魔法についての質問でしたね、こちらも遠慮無くどんどんお願いします」

「何となくで来た質問だったらシアさん大恥だね」

「ですね。その時は恥ずかしさのあまり、姫様のお眠りになっているベッドへ潜り込んでしまいかもしれませんね」

「何で！？ まったく……、一緒に寝るくらいならいつでもいいよ？」

「え？ 姫様、私は眠る時は全裸派ですよ？ もしかしてお忘れですか？」

「や、やっぱりだめ！ ちゃんと寝巻き着てよ！！」

「では今夜早速……。大丈夫ですよ、不安に思われることなどありません。優しく致しますから……」

「何する気！？ ……毎回こんなオチでいいの？」

「オチと言えば姫様のお仕事ですよね」

「私ってオチ要員なの！？」

教えて！ シアさん先生！！ その3

「皆さんご機嫌よう。世界一泣き顔も可愛らしい姫様の愛の奴隷、メイドのバレンシアでございます。姫様の泣き顔、そそられますよね……」

「今回は特に恥ずかしい！！ あつと……、お手伝いのシラユキです、ごきげんよう。泣き虫でごめんねシアさん」

「いえいえとんでもない。姫様はいつまでもそのまま純粋なお子様でいてくださいね」

「まあ、みんなに甘えられる間は子供のままでいいかな……」

「なるほど、一生ですか」

「一生甘えろという事ですね、分かります」

「甘えろって甘いエロに聞こえますね」

「どういう発想の仕方！？」

「はい。早くも第三回、『教えて！ シアさん先生！！』のコーナーがやって参りました。さてさて、今回のご質問はどういったものでしたか？ 姫様」

「はい、お手紙を読みます。お手伝いっばいわー！ えーと、『シアさんのパンツは何色ですか？』だって。それと……、パンツ！？」

「ほほう。前回の姫様のお言葉が実際に質問として来てしまった様ですね。ふむ……」

「質問が来ちゃったからにはしょうがないよね。何色なの？」

「今日は黒ですね。普段から黒や紺など濃い暗色系の物を穿いています」

「え？ あつさり答えちゃうんだ？ 色は好きだから？」

「いいえ、好きな色は白と青ですよ。姫様の髪と瞳の色、と言い直した方がいいでしょうか。暗色系の下着を着けるのは、私の普段着ている服装が黒ですからね。白などの明るい色は、夏物など生地が薄い物だと透けてしまい、目立ってしまうんですよね」

「あー、なるほどね。日本の学校でも校則で暗色系にするように、って決まっている所もあるよ。多分同じ理由じゃないかな」

「ええ、そうですね。お嬢様と呼ばれるような方の通う学校にはそう言った校則もあるのでは、と思います。姫様の通われていた学校にはありましたか？」

「校則？ う、うん、校則自体読んだこともないよ……」

「むむむ。いけませんよ、決まりは守らなければ」

「前世の事なのに怒られた！！　なにがむむむだ！」

「いい返答ありがとうございます。ちなみに姫様の下着の色は、白が多目ですね」

「何言ってるの！？　や、やめて！！！」

「それでは次の質問へと参りましょうか。姫様、続きをどうぞ」

「え？　今回はシアさんの下着の色の事だけだよ？」

「それと、と仰っていましたよね？　お手紙には続きがあったのは？」

「な、無いよ？　さあ、そろそろ終わりの挨拶だよ！」

「どれどれ……。『シラユキとシアさんの絡みが見たいです。百合的な意味で（笑）』ですか」

「いつの間に！？　に、逃げなきゃ……」

「絡みですか……。百合的な意味で？　ふむ……」

「あれ？　即襲い掛かってくると思ったのに……。シアさん？」

「ああ、すみません。ええと、姫様、お伺いしたい事があるので」

「う？ 何？」

「百合的な絡み、とはこういった行為の事を指すのでしょうか？」

「百合って言ったらそれは……、ん？ 言われてみると確かにパツとは出てこないね。こんな時は。教えて！ グー。ル先生！！」

「グール先生？ ゾンビの仲間ですか？」

「えっ」

「えっ」

「なにそれこわい、っと。うーん……、女の人同士でイチヤイチヤする感じかな？ 多分Hは含まれないと思う、キスくらいまで？ ちよつと安心かな……」

「安心？ キスはしてもいいという事ですか！！ では早速……！！」

「唇じゃなければいいんじゃないかな。私、家族みんなに結構キスはされてるよ？」

「むっ、普通過ぎる反応ですね。つまらないです」

「シアさんとはお風呂も一緒に入ってるしね、いやらしい触り方じゃないければ、素肌を直接触られるのもあんまり抵抗は無いねー」

「姫様の慌てふためく様を楽しもうと思っていたのに……、残念で

す
」

「あはは。キスする？」

「ふう……、キスだけして終わりますか。では、姫様からしてください」

「え！？ あ、いや、シアさんからしてよ」

「ん？ ははあ、なるほど、これはこれは……。姫様ー、してくれないと終わりませんよー。ふふふ」

「こんな落とし穴が！！ 私からは恥ずかしいよ！！ シアさんからしてよー」

「さあ夜はこれからですよ！！ お楽しみはこれからです！！ 早くハリーハリーハリー早く早く！！ 早く早く早く！！」

「その言い方はなんか怖いよ！！ うっうっう」

「ふふ、本当に可愛らしい姫様ですね。それでは私からすることにしめよう、いいですね？」

「うん……。恥ずかしくなってきたよ」

「では……」

「！？ なんて脱がそうとするの！！？」

「姫様が仰った事ではありませんか、唇でなければいいんですよ」

？ さあさあ、脱ぎ脱ぎしましょうねー」

「しまっ！ そういう意味じゃ……、うわ、ちよっ、まっ」

「ふう……。それでは、夜も更けて参りました、そろそろお別れのお時間ですね。また次回、何か疑問質問、要望を頂いた時にお会いしましょう。姫様？ 終わりますよー？」

「あああああああんな所にキスするなんて！！ シアさんの変態！！」

「あんな所？ どこでした？ 最近物忘れがひどくて。姫様の口から直接お教えして頂いても構いませんか？」

「なななな……！！ もうシアさんなんて知らない！！ 大嫌い！！！！」

「ちよっと首を吊って来ますね」

「うわあ！ 嘘だよ！！ 大好きだよ！！！！」

「ふふふ、冗談です」

「！？ うわーん！！！！」

「やはり姫様は泣き顔も可愛い……」

教えて！ シアさん先生！！ その3（後書き）

どこにキスしたか、という質問は受け付けません！！

教えて！ シアさん先生！！ その4

「どうもどうも、良い子の皆さん御機嫌よう、良い子の代表と言えば姫様ですね。最近急に涼しくなったり、また暑さが戻ったりと、姫様が体調を崩されないか心配な、メイドのバレンシアでございます。ここを読んで頂いている方もお気をつけて、と心にも無い事を言っておきます」

「ごきげんようー。……アシスタントのシラユキです。確かに風邪ひいちゃいそうだね……、心にも無い!?」

「気のせいです。姫様、助手やお手伝いに似たような感じの呼称が思いつきませんでしたね?」

「何故バレたし。シアさんも体調には気をつけてね」

「ありがとうございます。姫様の温かいお言葉に感動してしまいました。お返しという訳ではありませんが、涼し過ぎる夜は私を抱き枕にして頂いても構いませんよ?」

「シアさん私より体温低いじゃん……」

「体温くらい気合で操作して見せます!!」

「それなんてステインガー!?!」

「ARMSですか? 分かる人少なそうですね……」

「オウフ」

「では、『教えて！ シアさん先生！』、第四回を始めて行きたいと思います。姫様、今回の質問は、教シア初の世界観に関するご質問を頂きましたよ」

「おししあ？ そんな略称が……。ついに世界観に関する質問が来たんだね！ どんнадった？」

「『種族によって乳の大きさの平均値というのは変わるのでしょうか？』というご質問です」

「乳！？ 確かに世界観に関する事柄だけどさ！ 質問こついのしか来ないの？」

「いけませんよ贅沢を言つては」

「あ、ごめんなさい。ネタの提供してもらっておいてする反応じゃないよね」

「いえいえ、言葉が過ぎました、申し訳ありません。さてさて、質問のお答えですが、残念ながら……」

「さすがにこんな設定はしてないよね、どうしようか？」

「残念ながら連載開始前に既に設定済みなのでありました！-」

「連載前から！？　まさにこの作者にしてこのキャラありだね……」

「種族によつて胸の大小の差は確かに存在します。まずは代表的な人間種族、こちらは現代の人間と変わりませんね、様々です。大きい方もいれば、小さい方ももちろんいます。姫様はどうでした？

ああ、聞くまでもありませんでしたね、申し訳ありません」

「ひどすぎる！！　貧乳はステータスだ！　つていう偉い人の言葉もあるんだよ？」

「エロイ人？」

「言うと思ったよ！！」

「次に多い獣人種族について、こちらは種によつて様々ですね。代表的な犬族猫族の方々は小さめです。本編にも種族の名前だけ出て来ている有翼族と人魚族は大きめ、土竜族は小さめですね。比較的这个事なのでそれが絶対という訳ではありませんが、大体は種族で皆同じ様な大きさに落ち着きますね」

「胸の大小に差が出る理由はやっぱり、生活環境？」

「はい、いい質問ですね。土竜族が分かりやすいのではないのでしょうか？　土を掘り進むのに大きな胸は邪魔になりますよね、狭い通路でのすれ違いでも邪魔になると言うものです。犬族猫族に關してですが、彼等は高速で動き回る事のできる種族ですから、動きを阻害してしまうような胸は小さめになってしまふのです。胸が大きい

と走るだけで毛細血管の切断、ひどいと肉離れを起こしてしまう方もいるのだとか」

「全く想像できないね……。それじゃ、有翼族と人魚族はなんで？ 空を飛ぶにも、泳ぐのにも邪魔にならないかな」

「有翼族は翼で飛んでいる訳ではありませんよ？ あれはセンサーのような役割を持っているんです、空気の流れを感じ取る事ができるですよ。生まれながらにして空を飛ぶ魔法を使える有翼族ですが、翼を動かさないという事ではないですからね、羽ばたくのに胸の筋肉を使っているのでは？ 胸の筋肉はバストアップに必要不可欠らしいですからね」

「ずるい！ 有翼族の人ずるーい！！」

「ふふふ。次に人魚族ですね。こちらは幻の種族と呼ばれていますね、生態も殆ど説明されていないでしょう。仮に人魚族がエラ呼吸だとすると、エラの位置は腋の下辺りになるのでしょうか。有翼族と同じ様に、呼吸に胸の筋肉が使われるのでは？ と思います。泳ぐのに邪魔にはなりそうですが、魔法での水流の操作を得意とする種族ですからね、問題は無いと思いますよ」

「ずるい！ 人魚族の人ずるーい！！」

「エルフ、ハイエルフは人間種族と同じなので割愛します」

「うん。でも、私の周りって大きい人ばかりだよな。もげろ！」

「姫様巨乳大好き説のせいでは？」

「私のせいだったの!？」

「竜人族も有翼族に近いですね、大きめの人が多いです。ですが、竜人族は翼の出し入れが可能、という違いがありますね。翼をそこまで多く出されない方は、あまり大きくは育たないのではないかと種族的に大きめですから、それでも充分に大きいとは思うんですけどね……」

「ずるい！ 竜人族の人ずるーい！！ 三回目はちょっと恥ずかしいね……」

「同じネタはサンドまで、という名セリフを知らないのですか？ 次は変えてくださいね」

「サンドは私にはFFよりポケ。ンのイメージが強いね」

「サンド可愛いですよー」

「サンドパンっておいしそうな名前だよねー」

「えっ」

「えっ」

「なにそれこわいです。次に参りましょうか」

「次と言いましても、もうありませんね。ゴブリンやオーガの方々

は本編には出て来ないでしょうし、人型とは言っても、少し離れた外見ですからね」

「ぶっちゃけ設定してないんだよね？」

「してありますよ？ オーガは大きめですね。理由は、まあ、どうでもいいでしょう」

「してるんだ！？ うん、誰特だよね」

「実はもう一つ質問が来ているのですが、どうしましょう？」

「むむむ、どんな？」

「なにがむむむですか！ 失礼しました。『姫様がキスをされなかった場所はどこですか（殴打』というご質問です。では、これは姫様にお答えしてもらいましょうか」

「キスをした場所を聞くことを禁止したらこれだよ！！ 殴打？」

「さあさあ、キリキリお答えしてください！」

「嫌だよ！！！！ 場所を言うのはいいとしても、その様を想像されるのが嫌だよ！！」

「むう、姫様が不機嫌に……。では私が代わりに、ですが、ヒントだけです？ 上半身ではありません」

「シアさん！？ な、なにをするきさまー！」

「おっと、このままでは吹雪で全滅してしまいそうなのでやめておきますか。姫様の場合は召雷ですか？ 天雷でしょうか？」

「神雷で」

「LP消費は許しませんよ！！」

「できないよ！！ でも、サンダークラブならできそうだね」

「術スタンどころか即死しそうな威力になりそうですが……」

「サガネタはこれくらいにしようか」

「ですね。分からない人には、なにこれイミフ、過ぎます」

「綺麗に纏まったところで、今回は閉めとさせて頂きますね」

「え？ 何かまとまったの？ まあ、胸のサイズの方はちゃんと説明できたと思うけどね」

「ええ。次はどんな質問が来るか楽しみです」

「うん！ 次は何が来るかなー」

「世界観に関することだけでなく、個人への質問も大歓迎ですよ。姫様の特殊な性癖や、ご自分をお慰めになる頻度など」

「特殊な性癖なんてないし！ そそそんな事した事も無いよ！！」

「おや？ そんな事とは一体？ 私は自分を慰めると言っただけで……」

「なっ！ 私、シアさんのそういうところはキライだなー……」

「う……、『裏話』でくらいならいいじゃないですか」

「からかうのはいいけど、セクハラ発言はやめてね？」

「お、お叱りを受けてしまいました……。私、興奮してしまいます！！」

「何で！？」

「ではでは、また次回、キャラ紹介か教シアでお会いしましょう！」

「そろそろゲストも呼びたいね？」

「そうですね。いい加減キャラ紹介をまた一つ入れますか」

「うんうん。誰になるかは楽しみに！ 感想でのリクエストも受け付けますよ。謎が多すぎるキャラは後回しになっちゃうと思います」

すけど」

「私は姫様以外は興味ありませんからね、どうでもいいです」

「先生なのに！？　っと、また長くなっちゃいそうだよ。でわわ、また次回までごきげんようー！」

「ごきげんよう。リセットボタンを押しながら電源を切ってください」

「リセットボタンを押さずこのまま電源をお切りください。じゃないの？」

「ジェネレーションギャップですね……」

教えて！ シアさん先生！！ その5

「皆さん御機嫌よう。そろそろ姫様に天からのお迎えが来てしまうのではないかと悩んでいます、メイドのバレンシアでございます」

「え？ 私死んじゃうの？ あ、補佐人のシラユキです。シアさん、どういう事？」

「姫様は私が思うに、本当は天使なのではないかと……。女神様に内緒で下界に遊びに来ているのですよね？」

「その発想は無かった！！！」

「その発想しかありません！ ま、まさか女神様ご本人なのではない？」

「その発想も無かったよ！！！」

「早くも第五回となりました、『教えて！ シアさん先生！！』のお時間です。もう五回ですか、本当に早いものですね」

「うん。投稿のたびに新しい質問が来ちゃってるからね。嬉しいよねー」

「はい、本当に。では、はりきって参りましょう！ さ、姫様」

「はいはい！ 『世界一愛らしいシラユキ様の御召し物は普段誰が選んでるんですか？』だって。これはシアさんだね」

「世界一愛らしいとしつかりと付けている辺り、この方は分かつていらっしやる様で。はい、毎朝私が選ばせて頂いております。極々偶にですが、エネフェア様やユーフェネリア様、他の王族の方々にお選びして頂く事もありますね。メアリーとフランが選ぶ事はありません、むしろさせません」

「させませんなんだ……。今回は複数来てるから次々いくよー！
『どの様な衣装を着てらっしやるんですか？』だね」

「これは日によつて変わるのですが、残念ながら姫様のお言葉により、選択に幅を持たせる事ができないですよね……」

「ごめんねシアさん。私の言葉っていうのは、『動きやすい』『着替えやすい』『露出が少ない』だね。後はスカートにするって言つのがあるけど、元々スカート以外は選択肢に入っていないよね」

「ええ。なので、普段室内ではほぼワンピースをお召しになって頂いています。勿論毎日細かな工夫は致しておりますよ？ 姫様は金属製のアクセサリをあまり好まれていませんので、スカーフや飾りベルト、布製のアームレット等など。全て私が自作して幅を持たせています。やりがいのあるお仕事ですよ」

「自作とか……。またシアさんの株が上がってしまった気がするよ。これは家の中の場合だね、室内着。外に出るときはまた違つよ。こつちもその日その日で変わるんだけど、ミニスカートにオーバー

ニーソックスは決定事項みたいだね」

「姫様は跳躍魔法を使われるようになりましたからね、丈の短いスカートになるのも当然というもの。決してパンチラを期待している訳ではありませんよ」

「それを言わなければ思いつきもしなかったのに！！ まあ、いいけどね、別にシアさんになら見られても」

「私はむしろ、他の方が見えないように影ながら頑張っているんですよ？」

「そうなの？ オーバーニーは露出を少なくするためだね」

「はい、足の保護も兼ねていますね。姫様の生足を観衆に晒す訳には参りませんから！」

「そっちの保護！？ 実際は怪我の防止だね。布一枚でも有ると無いとじゃ全然違うからね。私が恥ずかしいからって言うのが一番大きいかもね」

「絶対領域は私が見たいので有りで」

「そっちを隠そうよ！！」

「……あれ？」

「どうされました？」

「ちょっと話しすぎちゃったかな？ 質問読むよ。『メイドさんチヨイスですか？ お姉様やお母様が選ぶ時とかあるんですか？』」
「メイドさんチヨイスだとしたら、やっぱり選ぶメイドさんによって衣装の雰囲気とか変わるんですか？」
「是非下着デザインも込みで特にスカート丈や腕と足の露出部分について詳しく教えてください！」
『の三個なんだけど、大体答えちゃったね』

「まずメイドさんチヨイスですが、私はメイドなのでメイドさんチヨイスと言えばそうですね。選ぶメイドによって、というのは今のところありません、姫様のお召し物を選ぶ権利を持つメイドは私のみですからね」

「それなら、シアさんはどう考えて選んでるのか話してみたらいいんじゃないかな？」

「どう考えて……、ですか、難しいですね。まずはメインとなる上下を選びますよね？ ワンピースの場合は一枚なのですが。これはその日の姫様のお顔を見て決めています」

「え？ 顔？ 顔を見て決めれるものなの？」

「すみません、説明し難いですね……。例えば朝、少し気落ちしていらつしやる様でしたら、華やかな、とはいいすぎでしょうか、明るい色合いを選びます。逆に上機嫌、テンションが高すぎる場合は大人しめ、控え目の色合いで落ち着いて頂こうとしているんです」

「そ、そんな事まで考えてるんだ……。適当でいいんだよ？ 適当で」

「適当に、という言葉には、適切な、という意味も含まれています。ですから、これからこれは変わる事は無いでしょう。上下が決まれば、まずは一度着て頂きます。この時もまた、姫様の反応を見てこのままで行くか、変更するかどうか決めますね。後は少し離れて全体像を確認、寂しいと思われる箇所へ装飾を追加していきます。余り派手過ぎず、しかし簡素にならぬよう心掛けております」

「まだ何か語りそうだからこの辺で一旦区切ろうか、長いよ……。後は下着のデザインとスカート丈、腕と足の露出かー」

「ユーフェニア様がお選びになる場合はフリフリヒラヒラになる事が多いですね、所謂ロリータファッションでしょうか。大変可愛らしいのですが、動き辛そうです」

「止まらなかった……。でも、これも質問にあったからいいかな。ユー姉様は自分にはあんまり似合わないからって、私の服はそれしか勧めて来ないんだよ。絶対似合うくせに何言ってるんだか……」

「夏場は大変そうですよね。熱中症になられてしまうのではないかと、見ていてハラハラ物でした」

「冷やす魔法も覚えたし、今ならもう大丈夫だけだね。まあ、実は結構好きなんだけどさ、スカート広げるためにパニエとか穿かないといけないから面倒なんだよね……」

「ワイヤーを入れると座れなくなりますしね。その辺りは便利さを取るか、不便なまま美を取るか、ですね」

「うんうん、どっちも程々が一番だね。次は母様？ 母様の選ぶ服

は……、服なのかなあれ」

「どちらかというを着るみに近いのでは？　さすがエネフェア様の一言に限りますね。あそこまで姫様の可愛らしさを最大限に引き出すことができるとは……」

「う、うん……。母様を選んでくれるのは嬉しいんだけどね、着るみはちよつと……。でもネコミミフードは可愛かった!!」

「ええ、本当に……。人死にが出なかったのが不思議でなりません」

「不思議でも何でもないよ!？」

「では最後、下着のデザインと手足の露出について。スカート丈の説明は特に必要ありませんね。ワンピースでは膝下、ミニスカートでは膝上少し短めですね」

「ちよつと短すぎるんじゃないかなーって思うんだけど、シアさんの選んでくれたものだし、文句は言わないよ」

「不満はできたら言ってくださいね。手足の露出は、足に関してはハイカーバーニーかに変わるだけなので基本は殆どありませんよ。腕の方も同じです、アームウォーマーを着けて頂いていますね。付け外しのできる袖の事で、どこぞの脇巫女を想像してもらえれば分かりやすいかと思われます」

「下着のデザインってどう答えたらいいんだろ？　前にリボンがついてる、とか？」

「姫様はまだブラの必要が全くありませんからショーツのみですね。ああ、姫様はパンティ派ですか？ それともショーツ派ですか？」

「うん？ どっちかと言うと、パンティ、パンツかな？ どうしたの急に？」

「いえいえ、何でもありません。まあ、下着のデザインは答えにくいですね。あ、Ｔバックはどうでしょう？」

「どうでしょうって……、下着のラインを出さないようにするためなら普通に有りなんじゃないの？」

「……つまらないです」

「勘ねないでよ！ こういう反応を期待してたんだか……」

「ふう……、基本ローライズですよ、紐パンですからね。はい終わりますよう」

「なんて投げやりな……！ シアさんもそう？」

「そうですねー。あ、姫様、Ｏバックはいかがです？」

「Ｏバックは無いわ……！ シアさんは私に何をさせたいの……？」

「やっと姫様らしい反応を頂けました、満足です」

「わけがわからないよ……」

「あ、まだあった『個人的には脚部絶対領域が発生していると嬉しいで（殴）。殴られてる!？」」

「おや？ その方とは趣味が合いそうですね。絶対領域部分を舐めてみたいと思いませんか？ 私は姫様に限りますが」

「変態!？ シアさんが変態に!!」

「変態はちよつとショックです。すみませんでした……」

「ショック受けちゃったよ……。ごめんねシアさん」

「お詫びに舐めさせてあげるから許してね、ですか？ ありがとうございます……!」

「言っていないよ……!」

「冗談です」

「このテンションの上がり下がりについて行けない……!!」

「今回も少し長めになってしまいました。反省反省です」

「シアさんが話を脱線させ過ぎなんだよ……。もっと反省してね」

「では次回の教シアは200文字に抑えましょう」

「極端すぎるよ！ まったくもう……」

「ふふふ、申し訳ありません。このコーナーは姫様と二人きりなので、つい嬉しくて」

「な……、恥ずかしいなあ……」

「それでは、今回はこれにて終了とさせて頂きますね。また次回まで、御機嫌よう」

「前回と違ってネタが少なかったかな？ まあいいや、ごきげんようー！」

教えて！ シアさん先生！！ その6

「皆さん御機嫌よう。開始の挨拶の一言を考えるのが面倒になってきた、メイドのバレンシアでございます。次回からは姫様に丸投げしようと思っております」

「ええ！？ 私そんなの考えられないよ？ ヘルパーのシラユキです。私は自分の役柄を考えるだけで精一杯だよ……」

「またまたご謙遜を、次回はよろしくお願いしますね。まあ、次回があるのなら、ですけどね……」

「やらないよ！ って何不安になる事言ってるの！？」

「ヘルパーのお仕事はタイヤから星を飛ばすだけではないのですよ？」

「カービィ？ シアさんの中ではヘルパーはウィリー一択なんだね……」

「最初の掴みの一言を考えるのがどれだけ大変か……」

「まだ続いてるのそれ！？ もう……、勝手に進めちゃうよ？ それでは、第六回の『教えて！ シアさん先生！！』を始めたいと思います！」

「姫様可愛らしい……！！ おっと、失礼しました。では、お手紙をどうぞ」

「うん、今回は魔法についてだね。『宇宙一キュートな姫様の使う魔法ですが、使うのに必要な条件が今ひとつ分かりません。』っていう質問を貰ったよ。難しいねー」

「宇宙一キュートですか……、なるほど。ええ、本文は姫様の一人称ですからね、説明も中々分かり易くできないというもの。しかし、前提条件を一つ知って頂ければ理解し易いのでは、と思います」

「前提条件？ 魔力とか？」

「いいえ、もっと簡単な事です。ウルギス様も仰っておられましたよね、魔法とは現象を再現するだけの物、と」

「うん。自然に起こりうる現象を魔法っていう技術で再現してるんだよね。ゲームの魔法はもっと色々な事ができそうだけだね」

「この前提条件の曖昧さが混乱を招いてしまっているかもしれない。火が燃える、物が落ちる等、物理現象でしょうか？ その範囲でのみ魔法としての発動が可能です」

「それは分かるんだけどね、物が燃えたりする原理の理解は必要なのかなーって。どうかな？」

「必要あると言えはあります。無いと言えはありませぬね」

「なにそれ？ 分かんないよー」

「そうですね……、一言で表現するなら、『当たり前』の事には理解は必要ありません。また曖昧に思われてしまわれるのではないかと思います、何となく分かりませんか？」

「な、何となくは……。それで、レーザーは撃てるの？」

「ここはメタ空間なのでそれが何なのか、どういう現象なのか分かってしまうのですが、本編での私たちには不可能ですね。姫様は如何です？」

「メタを抜くと……、なんか、光っているのしか分からないね。多分凄く強い光の玉を出すだけならできると思うよ」

「そんなところでしょ。wikiってみるとよく分かります。なにこれイミフです」

「wikiってみよう……。なにこれイミフ」

「レーザーが当たり前のように、小学校の理科の授業で原理を教えているくらいのお手軽技術だったとしたら、姫様のみでしたら可能だったのでは、と思います」

「光を細く照射するっていうのはできるんじゃないかな。後はそれをどうするかだね、分かんないや」

「魔法の応用はどうだろうね、風の鎧とか分からないんじゃない？」

「あれも何となくですよ？ ルーディン様が土を圧縮してナイフを

作り出しましたよね、それと同じです」

「何となく空気の圧縮層を作ったっていう事？ でも、うん、イメージとしては分かりやすいね」

「物語の始まる前より、ウルギス様がお産まれになるよりさらに以前から世界には魔法が存在していた筈ですからね、技術の進歩、イメージ力の進歩という物なのでしょうか」

「何事も最初の人って言うのは凄いな。んー……、結局曖昧な答えになっちゃったかな？」

「ぶっちゃけますと、こまけえこたあいなんだよ、になってしまいます。何となくでも分かって頂けたのなら幸いです」

「何となくだねー」

「何となくです。後は姫様の能力説明回待ちですね」

「説明回が遅くてごめんなさい。もう少しだけ待ってくださいね」

「まだまだ先のお話なのですが、もう一度魔法の追加説明が入ります。二十話近く先の話でしょうか」

「遠いねー……。それで魔法に関しては一段落、って言う感じかな。お、お楽しみにー！ ……ごめんなさい」

「二十話は遠いですね……。本当に申し訳ありません。気長にお待ちをお願いします」

「まだあるよー。『現世一らぶりいな姫様の服装ですけど、ノースリーブ＋アームウォーマーやミニスカ＋ニーソの場合、変な日焼けをしちゃいそうで心配です。そのあたり、バレンシアさんがどんな対策を立ててるのか教えてください。』だつて。ら、らぶりい……ん？　そういえば日焼けってしてないね。もしかしてシアさん何かしてる？」

「いいえ、特に何もしていません。日差しの強い日は帽子を着て頂いていますので、お顔の部分はいいとして。腕の露出部分や絶対領域は確かに日焼けしそうですね。姫様が何かしらしておられるのでは？」

「え？　バリア？　ってシアさん何かクリームみたいなもの塗ってくれてたじゃない、あれじゃないの？　あ、あれって滑り止めと、留め紐の締め付けで肌が痛まないようにするためだっけ？」

「はい、そうです、日焼け止めの効果もあるんですよ。実際姫様に日焼け止めです、とお薦めしたとすると、こういう反応を返されました？」

「日焼け止めなんていらないよー、か。さすがシアさんだね……。子供のうちはそんな事気にしなくてもいいと思うんだけどね……」

「美容は子供のうちから、ですよ。それに、姫様の日焼けは恐らく赤く腫れてしまうのではないのでは？　本当に真っ白な肌ですから、不安になってしまふんですね」

「か、過保護すぎる……。でも、ありがとっね、シアさん」

「いえいえ、当然の事です。お礼はまたキスでもさせて頂ければ…」

「嫌だよ！！ 今度はどこにする気なの！？」

「言ってしまったらさせてくれないじゃないですか」

「答えてるも同じだよ！ 絶対駄目ー！！」

「残念です。次は姫様からしてくださいね」

「うーん、それくらいならいいかな、恥ずかしいけど」

「キスして頂く場所は私の指定の箇所へとお願いしますね。ああ、ご安心を、唇は避けますから」

「どこ！？ どこにさせる気なの！？」

「言わせないでください、恥ずかしい」

「言わないと分からないよ！！？」

「指で示しますからそこへお願いします」

「なんかいやらしいよそれ！！ ……ブロントさん？」

「普通にかみまみた」

「もう……、シアさんの相手は疲れるよ……。最後の質問いくよ？
『結局バレンシアさんのバストサイズ、正確にはトップとアンダー
ーがいく（ゴギイッ？ ツー……ツー……プツツ）』。折れた
！？ え？ 何が折れたの今！？ あ、電話？ 電話だったのこれ
？ ん？ ……あれ？ シアさんどこに行ったの？」

「ただいま戻りました。すみません、姫様、急用が入ってしまいまして。何も言わぬままお側を離れてしまった事をお許しください」

「あ、おかえりシアさん。そんな事気にしなくてもいいよ。それじゃ読み直すね」

「それでは、今回はここまでとさせて頂きますか。次回はそろそろキャラ紹介を入れたいですね、姫様はどなたがいいと思います？」

「あれ？ 終わっちゃうの？ 私が簡単に答えちゃおうかな、シアさんのカップは確かだよな」

「Dです」

「そうだったけ？ ギリギリDに届かないんじゃないかな……」

「Dです」

「あ、痩せたの？ アンダーが細くなったのかな。トップは確か」

「Dです」

「う、うん。なんかごめんね……。あー！ えーと！ 『私』さん
でいいんじゃないかな！ 主人公だしね！！」

「人気のには『奥さん』さんが一番だと思われますが、ここはやはり主人公からですよ」

「名前無いと分かり辛いよ！ どうしようか……。名前は全員あるんだよね？ 公開しちゃう？」

「その時その場で考えましょう。必要な公開、必要でないならそのままでもいいでしょう。名前によって本文でのイメージが崩れてしまふ可能性もゼロではありませんしね」

「分かった、そうしようか。とりあえず、ですけど、キャラ紹介の一人目？二人目？は、『私』さんになる、かもしれせん」

「姫様はまだ最低限のみの紹介でしたからね。話数が進めば、またキャラ紹介に登場して頂くことになると思います。楽しみです」

「私はどうせ本編で色々書かれるからいらないと思うんだけどね」

「私としては、姫様以外の方の説明など必要無いと思うのですが」

「もっと私以外にも興味を持って！！」

「また次回、キャラ紹介か教シア、どちらかと言えばキャラ紹介でお会いできたら、と思います。それでは、メイドのバレンシアがお

送りしました、御機嫌よう」

「キャラ紹介はリクエストも受け付けてますよ。その他、疑問質問お待ちしています。ヘルパーのシラユキでした、ごきげんようー！」

「露骨な感想の要求、さすがは姫様です」

「シアさんうるさいー!!」

「ふふふ、申し訳ありませんでした」

教えて！ シアさん先生！！ その7

「みみみ皆さんごきげんよう！ えーと、えーと……。思いつかないよ！ どどどどしよう……。シアさぁん……」

「さ、さすが姫様、文句の付け所の無い完全な、素晴らしい掴みの一言です！！ ああ、失礼、姫様のあまりの可愛らしさに興奮してしまいました。皆様御機嫌よう。視覚から来る刺激にも物理的な破壊力が込められるのでは、と、まさに今全く新しい兵器の開発が頭をよぎった、メイドのバレンシアでございます。そろそろ主人公最強タグを付けてもいいのではありませんか？ 最強ですよ姫様」

「ひどい！ 最初の一言を考えるのが面倒だからって、まずは私に何かさせてから反応するとか……。ううう、補助員のシラユキです……」

「落ち込まれる姫様も大変可愛らしいです。今回は補助員ですか、そろそろ打ち止めなのではないですか？」

「よく分かるね……。次はもう無いよ、どうしようかな……。何かそれっぽい考えておくね」

「あまりご無理をなさらぬようお願いしますよ。もう姫様お一人のお体ではないのですから」

「うん、ありが……。、どつという意味なのそれ！？」

「言葉の通りですよ？ 深い意味はありませんが……。、何かおかしい言い回しでした？」

「くっ！ シアさんって裏話だと性格悪くない？ 人気下がるよ？」

「申し訳ありませんでした！！！」

「土下座！！？」

「第七回、『教えて！ シアさん先生！！』を始めて行きたいと思っています。ですがその前に、キャラ紹介でなかった事をお詫び申し上げます」

「ごめんなさい。教シアのその6を書き終わったら質問が来ちゃっててね、急遽今回のその7を書き始めたんです」

「さらに次回投稿も教シアその8になる予定です。キャラ紹介の執筆はリクエストが来てからか、余裕ができたらになつてしまうと思います。『私』さんのファンの方には本当に申し訳ない気持ちで…、ファンなんていますかね？」

「えっ」

「えっ」

「なにそれこわい。どうだろ、い、いるんじゃないかな？ シアさんの好みにもぴったりなんじゃないの？」

「可愛らしい方だとは思いますが。しかし、婚約者の方がいらつしやいますからね、からかい難いのではないかと……」

「からかえない人はあんまり興味ないんだね……。どういう基準よ、まったくー！」

「ふふふ、ちょっと安心したのでは？」

「何故バレたし……！」

「今回の質問は姫様にお答えして頂きますね。質問内容は私が読み上げます、今回は私が補助員でいいのかもしれませんがね」

「私が答えるの？ いいけど、上手く説明できるかな……。うん、頑張るね……！」

「はい、その調子です。今回は質問数自体少ないので割りとおつきり終わると思いますよ。では、まずは最初の質問です。『最強に可愛いエロフのシラユキちゃんですが、そっちの知識はどれくらい知ってるんですか？』とのご質問です。それでは最強に可愛い姫様、どうぞ」

「どうぞじゃないよ……！ 私ってエロフなの……！」

「本編通りの意味でしたらエロフなのでは？ エロフそのものですよ。女性らしい、素敵なエロフのお姫様ではありませんか。もっとご自分に自信を、と毎日のように申し上げていると思いますが」

「えー、その意味だと照れちゃうなー、ふふふ。……そっちの知識？」

「エロ方面では？」

「やはりいやらしい意味でのエロフだった！！　そんな質問来ちゃったの！？」

「ええ。私としましては……、是非お聞かせ願いたいですね！！」

「そこは止めようよ！！　私お姫様だよ！？　……一応」

「『十六歳の性教育で教わることも知ってるんですか？（笑）』という質問も合わせて頂いております。質問者の方、グッジョブ！　でございます」

「だ、誰なの！？　はっ！？　それってシアさんが書いたんじゃないの？　グッジョブとか似合わなさ過ぎるよ……」

「大反省致します。あ、いえいえ、さすがにそれは無いですよ。私がそんな回りくどい方法を取るとでもお思いですか？」

「ああ、シアさんなら直接聞くね……、納得。うーん……、どう答えたものかなこれは……」

「まずは性教育は一般受ける範囲で教わっていますよね。あの男女別に分かれて教えられるあれですよ」

「最近男女一緒の場合も多いんだよ？　体の成長も早いし、アレの経験が早くなり過ぎたりしてるからね、避妊は真っ先に教えるら

しいよ?」

「そうなのですか……、時代は進んでいるのですね。真面目な話はここまでにしましょうか、誰もこんなまともな会話など望んではおられません!!」

「もうここで終わりたいよ! とりあえず性教育は受けているってことで、ね」

「ふむ……、難しい質問ですね。ああ、こうしましょう」

「イヤ!!」

「私が幾つか質問致しますから、正直にお答えくださいね」

「まさかのスルー!? ううう、何?」

「姫様は所謂、アダルト雑誌、成年コミック、アダルトビデオなどご覧になられたことは……」

「直球で来た!!… な、無いよ! 見たことも読んだことも無いよ!!」

「なるほど、何度かご覧になっていらっしゃる様ですね。深くは聞きませんよ、……今は」

「話が通じない……。今は!?!」

「仲の良い友人の方々とそういったお話をされた事がありますよね？」

「あることが前提とされている……！！ それは、何度もあるけどさ……」

「ふむ、書籍やDVD等は友人伝いでしたか。後は、実際どういった行為を行うかなどは……。本編でフランが話していたのは……、口を使ったものですね。その事については理解されていた様で」

「やめて！！ ホントにやめて！！！」

「いい反応です、しっかりと理解はされているみたいですね。それでは後ろを使った行為については如何です？ ああ、胸を使う行為もありますが……」

「知ってるよ！！！！ 何よ！ もう！！ シアさんはどうなの！？ 結婚だってHだっしてたんだよね！？ どんな事してたの！！？」

「姫様！？ お、落ち着いてください、調子に乗りすぎました……。申し訳ありません……」

「……フーンだ」

「かかか可愛らしい！！！！ もう一度お願いします！」

「反省の色が見られない！！！」

「あ、私の方とどんな行為をしていたか、でしたね。お聞きに

「なられます?」

「聞きたくないよ!」

「本音でどうぞ」

「興味あります。って何言わせるの!! もう! もう!」

「姫様はムツツリスケベ、と」

「はい……、ムツツリスケベなお姫様です……」

「結論は『大体知ってる』、で構いませんよね? 今回はからかいが過ぎました、申し訳ありません」

「裏話だからってちょっとひどかったよ? でもこれくらいで嫌いにならないから安心してね」

「姫様優しすぎる天使か。ああ、女神様でしたね」

「まだそのネタ引つ張るの!? 女神様凄い美人だったよ、胸も大きかったし。もげろとは言えないよあれは……」

「ああ、そのお話はかなり気になりますが、本編の方でお願いします」

「でも女神様本人はもう出てこないと思うよ? だって神様だよ? そんなホイホイ出て来ちゃ駄目だってば」

「それもそうですね、残念です。それでは今回はこの辺りで」

「うん、また次こんな感じの質問が来てもスルーしちゃうからね！」

「質問によりますね。あまりにも答え難い内容の場合は感想返しでお断りする場合もございます。今後本編で書く予定の物等ですね」

「今回は質問少なかったからあっさり終わると思ったのに、結局長引いちゃったよ。でわでわ、また次回、教シアその8でお会いしましょう！ ごきげんようー！！」

「姫様がメインでもよさそうですね。それでは皆様、また次回まで暫しのお別れです。御機嫌よう」

「ホントはすぐなんだけどね」

「言っでは駄目ですよ。メ！ です」

「シアさん可愛いー！！」

「…………ありがとうございます」

「照れてる照れてる。あははー！」

「むっ…………」

「姫様、お疲れ様でした。喉の方は大丈夫ですか？ ちょっと叫び過ぎだったのでは……」

「誰のせいだと……。でも言われてみると……。んっん」

「名言だなこれは、ですか？」

「ホル・ホース！？ 分かりにく、けほっ」

「すぐにお飲み物をお持ちします！」

「あ、ちょ……。行っちゃった。別にいいのに……。ん？ なんだろこれ……。『それと、エロフの皆さんのスリーサイズが（え？ あ、すみません、ごめんなさい、ああ命だけは……。っ！ ……シーン）』。……。え？」

「お待たせしました！ どうぞ、お水で……。どうされました？」

「あ！ うっん、何でもないよ！ ありがとうシアさん！！」

「どういたしまして。ふふふ、可愛い……」

教えて！ シアさん先生！！ その7（後書き）

まさかの毎日更新に……

明日も0時にその8を投稿予定です。

教えて！ シアさん先生！！ その8（前書き）

今回は後半部分に、不快に思われるかもしれない内容が数行だけあります。

お気をつけて、と言いたいのですが、どうしても目に入ってしまったすよね、すみません。

読んで頂いた、読んでしまった方々の反応によっては、その数行を削除するかもしれません。

教えて！ シアさん先生！！ その8

「皆さん御機嫌よう。メイドのバレンシアでございます」

「あれ？ 普通ねシア。シラユキから『はっちゃけてるから気をつけてね！』って言われてたんだけど……。あ、ごめんなさい、裏話ではじめまして、ですね。シラユキの姉のユーフェネリア・リーフエンドです、御機嫌よう。今回はシラユキはお休みです。あの子の反応を楽しみにされていた方には残念ですけど、私で我慢してくださいね」

「はい、我慢します」

「あ、はっちゃけてるわ……」

「さくさく参りましょうか。第八回『教えて！ シアさん先生！！』の開幕でございます。今回はある匿名希望の方からのご質問です。ちよつと姫様にはお聞かせし難い質問もありましたので、急遽ユーフェネリア様をお呼びする事となつてしまいました。申し訳ありません」

「いいのいいの、気にしないで。私もたまには、ね」

「ありがとうございます。では、早速ですが最初の質問です。各種族の第二次性徴の年齢の平均はどれくらいか？ これは、初潮の来

る年齢の平均でいいですね。男性もほぼ同時期か少し遅れる程度ですし」

「な、なるほどねー。確かにシラユキには合わない質問ね。んー、人間種族はどれくらいかしら、十二、三歳？」

「ええ、それくらいで合っているかと。十一歳前後が平均でしょうか？ 勿論個人差はありますよ。ですが、今回はそれは除きます」

「エルフなら私にも分かるわ、大体五十歳前後ね。これはシラユキにも教えてあるわね」

「はい、本編でも一行だけ書かれていたと思います。獣人種族についてはお分かりになりますか？」

「代表的な犬族猫族ならね。確か、人間と同じくらいでしょ？ 十歳くらいよね」

「ほんの少しだけ早い程度ですね。他の種の方々については……、ちょっと難しいですね、寿命も成長速度も様々ですから。一つ一つ例を挙げてはキリがありませんし……、やめておきましょうか」

「そうね。それじゃ、後は竜人種族かしら。あ、ハイエルフはエルフと同じよ」

「本当に似た種族ですよ。ハイエルフについては分からない事ばかりですが、本編で少しだけ明かされる予定ですので、大体エルフと同じと想像していただければ結構です」

「竜人は私は会った事も無いのよね……、図鑑にも詳しい事は載っ

てないし」

「竜人は特に成長の早い種族ですね。エルフとは逆、が一番分かりやすい言葉でしょう。成人年齢は十歳ですよ」

「はやっ！ あ、失礼。十歳って、ちよつと早すぎない？」

「子供の産める体にまで成長する年齢が五歳か六歳くらいですからね。ちよつと想像できませんよね……」

「ホントに日毎に育ってるのが分かりやすいのかしら……」

「ええ、そうかもしれませんね。竜人の集落への立ち入りは不可能だと思われまますから、私たちが実際目にできる日は来ないでしょう」

「そんなに早くて内面的にはちゃんと成長してるの？ 十歳よ十歳。シラユキとは違うのよ？」

「内面的にもしっかりと大人と呼べるようになるまでは、集落の外へ出ることが禁止されていますからね。教育もちゃんとしているのでは、と思います」

「種族の違いって大きいわね……」

「はい。それだけに、あまり気にされる方がいない訳ですね」

「ちよつと時間を取り過ぎてしまいましたね、次の質問へ参ります。ユーフェネリア様の初体験時のご年齢なのですが……」

「そんな質問来たの！？ まあ、いいけど……。四十四の時よ。初潮が来てすぐにお兄様に抱いてもらったの。ふふふ」

「四十四歳で初体験ですか……。人間種族に例えると、十三、四歳の頃です、早めではありますが、早過ぎる、という事はありませんね」

「シラユキがいたら真っ赤になって暴れそうね、ちょっとおしかったかな。シアはいつ？ やっぱり結婚してから？」

「ノーコメントでお願いします」

「ふふふ、話せる時になったら聞かせてね」

「はい、最低でも姫様が成人なされるまでは話す気はありません」

「そんなに待たされるの！？ 気になるわ……」

「次々行きますね。性犯罪、主に子供に対する性的な」

「何よその質問は！！ これね、シラユキを呼べなかった本当に理由って……」

「ええ、絶対に聞かせられませんよね。そういった犯罪者に対する制裁はどうなっているのか、というご質問です。正直ここで書いてもいい内容なのか悩みました」

「本編でお兄様が言ってたけど、子供のエルフが一番狙われるのよね。最強種族って言ったって、子供だしね。子供に限らずエルフはそういう目で見られることが多いわ」

「そこまでしておきましょう。制裁についてですが、各国、各町で変わりますね、詳しい処分の説明は避けます。死刑もありますよ、とだけ」

「子供はそれだけで財産なのよ。全員死刑でいいと思うわ！」

「私もそう思います。この話はこれで終わりにしますね。書いていても、読んでいても気分のいい内容ではありませんから」

「どの世界も明るい話ばかりじゃないって事よね」

「ちなみに、質問者の方の頭の中ではユーフェネリア様は貧乳に力テゴライズされてしまっている様です」

「え？ 私小さくないわよね？ 普通くらいあるわよね？ シア、答えなさい！！」

「落ち着いてください。姫様の目には比較的小さめに映ってしまうだけです。私もユーフェネリア様もミランさんも決して小さくはありません」

「シアは大きい方だと思う……。私は平均くらいはあるわよ、失礼しちゃうわ、もう！」

「今のところ（その60現在）明らかに小さく見えるのはナナシさんだけですわ。メアもフランも大きすぎるんですよ！」

「お母様も大きいわよね。後コーラスは桁外れね……。羨ましいわ
たら無いわ」

「もげる」

「もげてしまうがいいわ」

「今日はシアとの心の距離が縮まった気がするわ。また呼んでね？」

「はい、必ず。姫様もお喜びになりますよ。それと、今回ユーフェネリア様はよそ行きモードでしたわ」

「いいじゃない別に……。私だって成人してるのよ？」

「ふふふ、ユーフェネリア様もまだまだ可愛らしいままでいてくださいね」

「あん、もう！ 恥ずかしいわね！ ここで終わりにしましょ！
私の次の登場はいつになるかわかりませんが、また会いましょう。
それでは、御機嫌よう」

「年寄りくさくなってしまいましたね、失礼を致しました。次回こ

それはキャラ紹介に……、なるといいですね。ではでは、皆さん御機嫌よう」

教えて！ シアさん先生！！ その8（後書き）

活動報告でも書きましたが、今回で一旦裏話の投稿はお休みになります。

一月に一回くらいは何か投稿しようとは思ってますけど、今までの様に質問の来たその次の日に投稿、というのはできなくなると思います。

もう一つ。

教シアその6であつた、

「いいえ、もっと簡単な事です。ウルギス様も仰っておられましたよね、魔法とは現象を再現するだけの物、と」

シアさんのこのセリフなのですが……

この教シアその8と同日投稿の『転生』その60でのウルギスの発言でした。

自分ではもう以前に書いたつもりになっていたみたいで、本当に、本当に申し訳ありませんでした。

『私』（『トリップ』本編完結後）（前書き）

久しぶりの投稿で久しぶりのキャラ紹介回。
そしてそのキャラも久しぶり過ぎるキャラと、久しぶりずくめです。

『私』（『トリップ』本編完結後）

「皆様、お久しぶりでございます。とは言っても本編では毎回の如く登場していますので、そうは感じられないかと思いますが……。姫様の忠実なるメイド、バレンシアと」

「こ、こんにちは。『私』、です……」

「一言だけですか？ まあ、いいでしょう。今回のゲストはこの方、『異世界トリップの現実』の主人公、『私』さんをお呼び致しました……」

「よ、よろしく願いします……」

「……？ やはり違和感が……。私さんはもっと、何と言いますか、口数の多い方ではなかったですか？」

「あ、あれは、その……。い、一人称の、心の中の声で……」

「ああ！ そ、そうでしたね、すみません。そうになると、あまり会話文形式の本文には向かない方だったのですね……。これは、どうしたものでしょうか」

「じ、ごめんなさい……」

「幸いここはメタなホニャララ空間、ある程度心の声も出るように致しましょう。では……」

「え……？ なんですかその手の動き、え？ あっ、ちょ！」

「気を取り直して参りましょう。まずは、本編終了後、という事に致しまして、ご婚約おめでとうございます」

「あ、ありがとう？ うう、なんか頭がクラクラするんだけど……。何したんですかメイドさん。まあ、いいや。リアルメイドさんと接する機会なんて早々ないしね。メイドさんだよメイドさん、凄いなー、憧れちゃうなー」

「それほどでもありません。私の事はお気軽に名前どうぞ、シアと呼び捨ててくださって結構ですよ。しかし、リアルメイドですか」

「あ、はい、それじゃシアさんでお願いします。メイドさんって漫画とか小説の中の存在だと思ってたんですよ。しかもこんな美人で……。もげる！」

「ほう、私ももげる対象に入りますか、嬉しい事です。現在私さんの住んでいる所は小さな村ですからね、『奥さん』さんのご実家には何人かいるのでは、と思いますよ」

「ああ、口が勝手に……。なにこれこわい。町については全くと言っているけど何も設定がされて無いですよね。おまけで書くこととしたのもお母さんの家族の襲来事件だけでしたから。あの村の中だけの出来事のみしか最初から書くつもりも無かったんですね」

「簡単に説明してもらっても？」

「はい、いいですよ。もう書くことは多分無さそうですから。お母さんの家族、ええと、お爺様、お婆様と、叔父様叔母様とそれぞれのお嫁さんと旦那さんと子供まで、全部で九人だったかな。後は使用人っぽい人も何人か、まあ、それはいいですね。いきなり出来た孫の私と、その結婚相手の彼の顔を見に来たらしいんですね。最初に会ったのが私だったんですね。お互いどんな関係かも分からずに村の案内とかしちゃってて……」

「ああ、中々面白そうですね。勘違いが一つのテーマとなっていただけありますね。と、失礼」

「ふふ、シアさん丁寧な人。これは本気で憧れちゃうね！　っと、まあ、それから紆余曲折あって……、そのー、ですね。叔父様の息子さんにいきなり告白、求婚されたんですね……。どうやら一目惚れされちゃったみたいで……」

「じ、実に面白そうですね！！　やはり他人のドタバタ話ほど面白い話はありませんね！！」

「なんという正直なメイドさんだ！　後はいつものように私が盛大に慌てて、そこに皆が帰ってきて、って感じの流れですね。いやー、恥ずかしいっいたらないですよ……」

「ふふふ、ありがとうございます。では、おまけのお話はこれくらいで、私さん本人について聞いていきましようか」

「身長体重スリーサイズは内緒ですよ？　まあ、私の体に興味を持つのは彼くらいなものですけどね。えへへ……、はっ！？　今のはノロケじゃないですよ！」

「はい、まずはそこですね。私さんはご自分のことを美少女美少女と連呼していましたよね。ですが、実際はそんな事ある訳は無いと達観されていた」

「ええ、背も低いですし胸も無いですからね！ シアさんが妬ましい……、パルパル。恥ずかしい話ですけど、これも一つの勘違いだったんですよね」

「ぶっちゃけてしまえますと、本当に超が付くほどの美少女です。ああ、私は姫様一筋、安心してくださいね」

「何の安心？ 学校でも告白とかは特にされた事も無かったですし、身長と胸のサイズが最大のコンプレックスだったんですね。うじうじと悩む暗めの女の子、周りから見ると大人しめの可愛い女の子。お嬢様っぽく見られてっていうか、実際お嬢様でした。男友達、と言うか、普通に話せる男子は数人のみ、一番仲が良かったのが彼ですね、中学に上がってから付き合ってたんです」

「彼さんとは遠慮なく話せていたようですね。恐らくそれで周りの方も勘違いしてしまっていたのでしょう。彼さんも貴女の事を想っていた様ですし、それがまた勘違いに拍車を掛けていた、のかもしれないですね」

「一目惚れだったみたいですよ？ 私は私でゆつくりと好きになっ
ていつていたのかもですね。もう！ こんな話はやめましょうよ」

「自分で言うっておきながら何を……、面白い方ですね。つつい口

を滑らせる、という事が後半多かったですね。やはり安心からでしょうか？」

「ですね。一つ一つの話の区切りで少しずつ変わっていく私を上手く表現できていたらいいな、とは思ってたんですけど、難しすぎましたね。最初は家族、親という存在。次に異世界からの来訪者だと告白。告白と言った方がいいですね。先バレしていたんですけど」

「あの鼻歌の。上機嫌でしたよね。あれはやはり、前日の彼さんのセリフのせいですね。ふふふ」

「そうなんですよ！ 笑顔が可愛いとか言ってくれちゃって！ もう！ しかもその日の夜もまたドア越しに楽しい話をしちゃって、完全に気が緩んでたんですね。家族がいるっていう安心と、その、好きな人からの言葉で……、きゃー！！！」

「可愛い反応ですが、他人のノロケはあまり聞いて面白くもないですね。次々行きましょう」

「ふふふふ。彼のこと大好きなんですよ、大目に見てくださいねえへへへ、幸せですよ……。さらにそのすぐ後、彼と両想いだったことが分かって……」

「大暴走してましたね。私も姫様にあんな風に甘えられたいものです。そういえば、彼のサイズは中々のモノだったそうで」

「！？ や、それはちょっと……」

「実際挿れられてみて如何でした？」

「な！？ セクハラメイドさん！？ なにこの人素晴らしい、じゃないっ！ その、まあ、痛かったです、とだけ……」

「むう、姫様と違いあまりからかい甲斐のない方ですね。さすがはムツツリスケベ、そして初体験を済ませただけの事があります」

「あ、後、幸せでした！！ えへへへへへ」

「他人のノロケがここまで疎ましいものだとは……。不覚……！！」

「なんかあんまりキャラ紹介っぽくないですね。裏話的な感じで、あ、裏話の場だからいいのかな？」

「ええ、正直キャラもうあやふやですから。設定も何もあったものではないのかと思われます。少し時間を空けすぎましたね」

「ふふ、まあいいじゃないですか。私は幸せですよ？ この先結婚して、子供が出来たり、ふふふ。幸せが怖いですね」

「美少女の幸せそうな笑顔はくるものがありますね……。はっ！ 私としたことが……！！ これは姫様に至急癒して頂かなければ！！」

「シアさんはそっちの人なんだ……。ふむふむ、セクハラ女性好きメイドさんであるか。パーフェクトだシアさん」

「感謝の極み」

「ああ！ 打てば響くこの感覚！ いい！！ 異世界じゃネタも通じませんからねー」

「ブロントさんはともかくとして、ジョジョとヘルシングネタは美少女として如何なものかと」

「作者の趣味です」

「メタ空間故致し方なし、ですか」

「後は少し、ご自由にどうぞ」

「ご自由について……。ま、いつか。『異世界トリップの現実』を最後まで読んでくれた方、ありがとうございました。私のお話はまだまだ続くのですが、一先ずの終わり、という事で。異世界に飛ばされてしまった私が、完全にその世界の住人として生きていこう、と、そう思うまでのお話でした。多分伝わって無いですね、あはは。本当はもっと暗めの話になる予定だったみたいなんですけどねー。いやあ、危ない危ない。『i f』の方の私はいたいどうなっていることやら……。あつちの私は私であって私ではない私なのですが……。イミフ！ それはどうでもいいとして、これを読んだ後、また『トリップ』を読み直してみるとまた違った感覚で読めるかもしれませんよ？」

「決してアクセスを稼ごうなどと言った魂胆はありません！」

「いいなこの人……。お母さんに似た何かを感じる？」

「さて、そろそろお別れの時間です。作者本人もこんなキャラだったわけ？　ともう限界です」

「メタい！　でもお母さんはまだまだちゃんと書けそうなのが……。私主人公なのに……」

「おっと、大事な事を忘れていましたね。私さんは主人公と言っようりかは、登場人物の一人に近い位置にいらっしやったんですね」

「あ、そうでしたね。実は異世界からやって来た、彼は私の事が好きだった、など、私のいないところで彼が勝手に話しちゃってたりしていたのがそうですね。ゲームみたいに、主人公たちが話を進めなければ世界は平和なまま、っていうのは避けたかったんです。スライムでレベル上げてたら他の勇者が魔王を倒しちゃいました的な？　表現が難しいですね」

「今回で私の出番は完全に終わりですね。ちょっと寂しい気もしますが、さっきも言ったみたいに私の物語はまだまだ続いています。また別の私でお会いする事があるかもしれませんね」

「お疲れ様でした。ゆっくりと彼さんとの逢瀬をお楽しみください」

「逢瀬！　い、いやらしいわ……。このメイドさんいいなあ……」。

「一家に一人欲しい」

「残念ですが私は姫様の専用メイドですので……。ですが、一晩のお相手くらいは……」

「そんな趣味はありません！ でもちよつと興味はあります！ ああ！ また口が勝手に……」

「キャラを一晩貸し出しましょうか？ あの子は中々……」

「ほうほう？ そこの所ちよつとくわし……、結構です!!」

「ふふふ。やはり可愛らしい方ですね。それでは皆様、また次回、いつになるか分かりませんが、また次回お会いしましょう」

「素晴らしいお辞儀だと感心はするがどこもおかしくはないですね。私はさよならかな。それじゃ、皆さん、さようなら!」

『私』（『トリップ』本編完結後）（後書き）

『私』ちゃんってこんなキャラでしたっけ？ と本当に自分でもあやふやです。

本編を書かずに何をやってるんだか私は……

異世界転生の現実 その139・5（前書き）

本編140話で書かれていた夢の話です。

パパッと書き上げるために会話分のみにしてみました。

いろいろ注意……かも？

「起きなさい。起きなさい……、私の可愛いシラユキや……」

「何その勇者の母親的な起こし方！？ ……あれ？」

「ふふふ。相変わらずのツツコミの冴え、嬉しいわ」

「そこは会えて嬉しいとか言うところだと思っただけ……。ええと、お久しぶり、かな？」

「あなたにとつてはそうかもね。でも、私は最低でも一日に一回はシラユキの様子を覗いてるから、そうでもないわね」

「あ、やっぱり覗いてるんだ？ 嬉しいような、ちょっと複雑な気分……。うーん？ これは、夢？」

「ええ、そうよ。今日はちょっとシラユキにお願いがあつてね。シラユキが寝てる間だけ、ちょっと意識をこちらに引っ張ってきちゃったの。体が目覚めれば自然と元に戻るからそこは安心していいわよ？ 意識不明で大騒ぎ、とかにはなったりしないからね」

「うん、分かった。それにしても……、何このくつろぎ空間は！ 炬燵にみかん、座椅子に座布団に、冷蔵庫とテレビまであるよ……。50型くらい？ それ。大きいね……」

「やっぱりこれくらいないとねー。面白いわね、シラユキが元いた世界って、特に炬燵は素晴らしい発明だと思うわ。でもこれは、人を駄目にする諸刃の刃。注意して使わないと、ね」

「人じゃないからいいんじゃないのかな？ ああ……、前来た時はもつと西洋風と言うか、外国のお城の一室って感じだったのに……。二十年の月日は残酷だった……」

「あれ？ 気に入らない？ 私としてはこじんまりとして纏まった空間は落ち着けていいと思うのだけれどね。シラユキの部屋だって似たような物じゃない？ 広すぎて落ち着かないーって狭い部屋にしてもらってたでしょ？ 確か」

「そう、だっけ？ いつの頃だろ……？ それでも充分広いだよねー。ふふ、確かにこれは落ち着いていいかもね。あ、これってやつぱり、目が覚めたら忘れちゃうの？」

「うん？ あ、そうね……。あー、ちょっとメンドクサイわね……。私個人としては覚えてて欲しいけど……。シラユキは忘れたい？」

「ある意味忘れたいよ……。でも、忘れちゃうのは寂しいかな。そつちの都合が悪くなければそのままでもいいよ？」

「それじゃそのままね、うん。あ、炬燵に入りましょうか。っと、さ、シラユキはここに来なさい。ほらほら早く、熱気が逃げちゃうでしょ？」

「ああ、足の間に……。足を広げて座らないで！！ イメージが！ イメージが崩れちゃう！！ その姿で炬燵は似合わない！！」

「はいはい。どうせここには私とシラユキしかいないんだからいいのよ。ふふ、本当に可愛い子……。返したくなくなっちゃう……」

「え？ ちよつ！ ひ、人攫いー！！」

「きゃっ！ もう、暴れないの！ …… あんつ。こーら、ドサクサに紛れて胸を揉まない。冗談……、では無いんだけど、そんな事しないから大丈夫よ……」

「むう……、母様クラス……」

「んっ、感じちゃうからそれくらいにして？ シラユキって本当におっぱいが好きなのね……、ふふふ。吸う？ 丁度乳首もた」

「吸わないよっ！ どこへ行っても赤ん坊扱いだよね私って……」

「丁度今、体の方もフラニーハナルスヒアメアロの吸ってるわよ？ 可愛いわあ……。 …… 見てみる？」

「見ないよ！！ よくフランさんの本名覚えてるね。 …… ホントに吸ってるんだ私って……。 信じてなかった訳じゃないけど……。 真実を突きつけられたくは無かった……。 ……！！」

「あ、お菓子はちよつと今切れちゃってるんだったわ、ごめんね？ 今度また盗って来なきゃね……。 あの子の作るのって美味しいのよねー」

「精神体？ なのに食べれるの？ お腹も空いてないし、いいよ。 落ち着いたし、そろそろお願いを聞こっか？ 私にできる事なのかな……」

「シラユキにしかできない、と言うよりも……、さすがにこれはシラユキしか知らないからね」

「私しか知らない？　なんだろう？」

「ええとね……、あら？　どこにやったかしら……。あ、あった、あったわ。ほら、これなんだけど……」

「うん？　うん！？　な……、え？」

「船を貰って、その後転職できる神殿までは進めたのよ。その神殿の北で本を拾って、でも一個しかないから転職に使うのは勿体無くて袋に入れてるんだけどね？　その後なのよ。小さな島国の洞窟に入ったら、首が五本しかないのに八股の大蛇とか言う、どこからどう見ても蛇に見えないモンスターが待ってて、全滅しちゃってね。泣く泣く他に行ける所を探したら、今度は田舎者は入れてくれないって言う意地悪な門番がいたり……」

「まさかの?!？　あー、これって確か？　から？　までがセットになってるやつだね。え？　？と？　はクリアしたの？」

「うん、？　はね。？　は……、長い洞窟を抜けた先で青い炎みたいなモンスターに……。そこで心が折れたわ……」

「うん……、うん……！！　嫌な……事件だったね……。分かる、分かるよ！！　えーっと、船をとった後はね……」

「そんな感じかな。まずは力ギを取らないとねー。あの日本っぽい

所のボスはまだちょっと強いかもね、後回しにしてまずは行ける所を全部回ってみるといいよ」

「なるほど、まずは最後の鍵、ね。姿を消すアイテムで門番を素通りするのね。ふむふむ……、メモしておこうかしら」

「ふふふ。でも、こういうのって自分でクリアするからこそ面白いんだと私は思うなー」

「うつ、やっぱりそう？ でも、あの青いモンスターのせいで私の心はもう……」

「あはは。まだ？ までもあるんだから先は長いよ？ でも、難しいのは？ くらいかな？ 太陽の紋章を探すよりは簡単だと」

「?? そろそろ？ が出るんじゃないかなかったかしら……」

「で、出たらまた呼んでください……！！ お願いします……！！」

「ふふふ、はいはい。シラユキはこのシリーズ大好きなのね……」

「あ、そうそう。家の中で読書ばかりしてちゃだめよ？ たまには外で遊びなさい。お勉強もしなくちゃね」

「うわあ、お母さんみたいだ……。読書も一応お勉強じゃないかな？ うん、なるべく外で遊ぶようにもするね」

「ふふふ、いい子いい子。私もあなたのお母さんのつもりなのよ？ 背を伸ばしてとか、胸を大きくしてー、とか、そういうお願いは聞いてあげられないけど、白雪草に向かって会いたい、って一言だけでも言ってくれたら即会いに行っちゃうくらいあなたのこと、とても大切に思ってるわ」

「あ、ありがとう、ふふふ。でも、それは色々と問題がありそうだからやめておくね……、って言うか、もう二度と会えないんじゃないのかな？」

「最初はそのつもりだったんだけどね、会いたくなったら会いに行けば、会いに行けないなら呼んじやえばいいか、って結論が出たの。あの時は寂しさに耐えられなくて泣いたわ……。ごめんね、長雨降らせちゃって」

「あの雨涙だったの！？ す、スケールが大きいお話なのに全然凄く感じないのは何でだろう……。あの雨のおかげで助かった地域もあつたみたいだし、悪い事じゃないと思うよ。むしろよかったんじゃないかな？ さすがだねー。やっぱり凄いな、うん」

「シラユキもね、会いたくなったらいつでも呼びなさい。まあ、覚えてたらなんだけどね？ これは夢だし、部分部分しか覚えて無いと思うから。覚えてて欲しいわ……」

「やっぱりある程度は忘れちゃうんだね……。ちよっと寂しいな……」

「あらあら甘えちゃって、可愛いんだから……。あんっ……。む、胸に頬擦りしないで……。私、胸弱いよね。ねえ、やっぱり吸う

「？」

「す、吸わないからね！ もう！ ……でもちよつとくらい、って思っちゃった。なんでだろ、素直に甘えちゃえるなー」

「ん、っと、はいどうぞ」

「うわ！ 出しちゃ駄目！！ ってやっぱりノーブラー？」

「ふう……、最高のひと時だったわ……。軽くイキそうに」

「恥ずかしいこと言わないで！！ ううう、嬉しくも恥ずかしいひと時だったわ……。この記憶は消してね？ お願い。まだ、その、エッチな声が耳に残って……」

「ふふふ、ちゃんと消してあげるから安心なさい。……………やっぱり返したくなかったわ」

「ええ！？ また呼んでくれれば遊びに来……、あ、もしかして」

「そう、もう時間よ。最後に何か、あるかしら？」

「う、うん、ええーっと……、お礼はこの前言ったよね……。ううーん？ えっと、大好き」

「はうっ！！ もう返さない！！ ずっとここで一緒に暮らしまし

よ!？」

「うわう！　だーめ！！　私が死んじやったらそうしよう？　あ、殺さないでね？」

「え？　いいの？　約束よ？　あ、そろそろ消えちゃうわね。それじゃ、シラユキ。ふふふ、また、ね？」

「うん！！　また、だね？　ふふふ」

「お別れのキスでもしましょうか？」

「うん、いいよ？　って、唇？　うつつ、恥ずかしいな……。んー、んっ？　んんん！？　んー！！！？　にゅ、ニユルツて来た！！　し、舌!？」

「ごちそうさま。　うふふふ」

異世界転生の現実 その139・5（後書き）

シラユキがどこを忘れ、どれだけ覚えているかは、謎のままに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3344w/>

現実の裏話

2011年12月3日14時52分発行